

鬼界島流人譚の成立

——俊寛有王説話をめぐって——

1 問題の所在

鬼界島流人説話がどのようにして成立したか。この問題にはじめて光を投げかけたのは柳田国男氏の「有王と俊寛僧都」^①である。氏の論の新しさは、平家物語をとらえる次のような眼の新しさにあった。

壇の浦の哀史が水陸の形象を制して、今のような大きな結集を遂げる以前にも、なほ盲法師が琵琶を弾じて、人の世のあはれを説く風は盛んだつたのである（中略）。明瞭に言ふならば語りの方が前なのである。文学は単に之を筆録し、又やゝ修正を加えたに過ぎぬのである。

と。そして柳田氏は流人説話成立の背後に有王という伝承者の存在を指摘された。九州をはじめ各地に残る「俊寛僧都の墓所」が「有

谷 口 広 之

王といふ侍僮の旅」にもとづくという指摘である。鹿谷の謀議、その発覚、厳しい処分という事件の経緯のなかで、都を中心とする部分は多くの人の知るところであるが、鬼界島での俊寛の最期については「有王がもどって語らぬ限り、誰がこの悲愴なる最後の光景の、曾て世に現はれたことを知るものがあらう」という根拠から「私はこの名譽多き一篇の文学に隠れて有王の参加して居ることを疑はぬのである」とされる。そして有王が主の最期をみてとつて高野の蓮華谷に入り諸国を修行して主の後世菩提を弔つたという平家物語の記述から、高野聖としての有王ということを重視される。それは「佐々木熊谷などの名だゝる勇士が、人生の無常を観じたのも、さては斉藤滝口の入道などという優男が、恋を菩提の道にのりかえたものも、すべてこの一谷の間の出来事であった」というように、平家物語のなかの多くの話材が、この高野の蓮華谷から供給されて

いて、鬼界島の流人説話もまた、それらと同じくここを發生源とするという見方である。加えて、俊寛の最期の光景にとどまらず、流人説話のなかの康頼成経に関する話、つまり二人の熊野詣・祝言・卒都婆流の話も「彼がたゞひとり神明の加護に洩れて島に取残されて嘆き悲しむという、後の足摺の段の伏線としか思はれない」と断じ、「根本が島で起った出来事であるからには、是も亦俊寛側から出た材料が種になっていると認めてよい」と結論されている。

柳田氏の指摘の要点は、有王と称する語り手が存在し、高野の蓮華谷を拠点とする聖たちが、古くから盲僧たちの活動の活発であった九州の盲僧集団を媒介としながらこの話を伝播したという点にあるだろう。柳田氏の見解に最初に疑問を投じたのは富倉徳次郎氏である。富倉氏は、平家物語がその原作から六卷本十二巻本と成長していく過程という視点を、流人譚の成立を説明していく軸として設定された。氏は鬼界島流人譚を、祝言・卒都婆流・足摺・有王島下の四説話に分け、そのうち祝言に(竜女出現と椰葉との奇瑞説話も含めて)色濃い熊野信仰を指摘され、この部分が後の増補であることを推測される。その根拠は、後者の説話群と祝言との間に鬼界島の描写における決定的な相連のあること、そして源平盛衰記が巻七に「俊寛成経 移鬼界島事」「康頼造卒都婆事」を置き、「康頼祝言」は巻九にかけ離れていること、また語り系諸本では竜女出現椰葉奇

瑞説話が「卒都婆流」に入っているのに対し増補系が「康頼祝言」に収めており、後者の方が本来の姿であると考えられることなどである。

だから氏によれば、本来の流人譚は祝言を欠き、後に「熊野関係の語り部によって管理せらるる事によってここに熊野信仰説話としての『康頼祝言』が加えられることになり、さらに竜女化現説話・椰葉説話も加えられ大きく成長した」ということになる。

そこから柳田氏へ疑問として提出される論点は、九州嘉瀬の地にいたという「遠つ島のことを語る人」の説話が平家物語に流入したと考えると時間的な無理を生じること、つまり、蓮華谷聖や一遍上人の念仏団の活動と平家物語の成長とを重ねてあわせてみると前者の方が時代を下ることになってしまうということである。

そこで富倉氏は、有王ではなく康頼に注目され、卒都婆流はむしろんのこと足摺説話、有王説話までも当初は康頼の周辺、あるいは康頼が帰洛後寄宿したという双林寺周辺をその發生源として考えられた。そしていったん形を整えた流人説話が、以後平家物語の成長と照応しながら熊野信仰の色を濃くし、康頼祝言も含みこんで現在のような形をみるに至ったといわれるのである。

以後この柳田・富倉両説をもととしてさまざまな意見が出されている。福田晃氏は富倉氏の説に対し、康頼関係の説話についてはそ

れで是とされながらも、足摺有王島下についてはやはり有王という存在を重視される。それは現地の鬼界島において横死した俊寛の霊を慰める巫覡の存在が必要で、鎮魂の語りとして俊寛有王の語りが存在したはずだという見方である。従って福田氏の論は柳田説の補強として位置づけることができるが、山下宏明氏、今成元昭氏、麻原美子氏の見解では、流人説話への有王参画の時期を、高野聖の活動の時期にずらしてそれぞれ考えておられるようである。

以上のような経過をふまえて以下私見を述べたいと思う。

2 硫黄島の伝承

福田晃氏の紹介によれば、山中耕作氏は「俊寛伝説考」で現在の硫黄島（鬼界島）での伝承採集を行なわれ、俊寛にまつわる伝承のいくつかを紹介されている。箇条的に記すと

一、旧の七月十五日 村中総出で俊寛のため夜通しの踊りがなされる。その際俊寛燈籠なるものをもって俊寛の霊を祀る。

一、年の瀬の二十八日の夜が俊寛の命日で俊寛山からとってきた椿の新油をとす。

一、九月九日俊寛から伝授されたという笠踊りによって悪魔退散の祭をおこなう。

一、俊寛堂、俊寛河原などの遺跡がある。

鬼界島流人譚の成立

一、近年まで村人はすべて時宗の徒であった。

こうした事実にもとづいて福田氏は「俊寛の亡魂が巫覡の口をかりて、この世の人々の語りかけたのは、まずはこの南海の孤島においてであったことが当然推されよう。」とされる。先に述べたように、足摺有王説話までも当初は康頼周辺に発したとする富倉氏に対する福田氏の反論であり、氏は「この島においてその霊は、最も早くにその祭りを要求し」という点に足摺有王説話の発生をみておられるのである。

山中氏のいわれる硫黄島とは、鹿児島島の南、種子島の西にある三辺三島のうちの一島であるが、この島が平家物語にいう鬼界島であることにはば間違いはないと思われる。

そのことについても少し考えてみたい。俊寛・成経・康頼の遠島流罪は歴史的事実として明白であるが、その流刑地については必ずしも明らかではない。愚管抄が

俊寛ト檢非違使康頼トヲバ硫黄島ト云フ所ヘヤリテ、カシコニテ俊寛ハ死ニケリ^⑧

と記すように、もともとは鬼界島ではなく硫黄島といていたのである。奄美諸島に喜界島という島はあるが、鬼界島という名はどのような固有名詞ではなく普通名詞的響きが強いように思われる。それは栄笠治氏が「鬼界島について判明する客観的な事実」は『鬼界・高

麗・契丹』と併称される遠国である事のみである」と述べられているように、果てしなく遠い絶海の孤島を表現する一般的島名ではないだろうか。それに三名の鬼界島流罪に先立つ歴史資料のなかにも流刑地として鬼界島の名を見出すことは、管見の範囲内ではできないので、やはり愚管抄のいうように硫黄島とすべきであろう。富倉氏も「平家物語全注釈上」で詳しく考証されており、この硫黄島は先に述べた鹿児島県大島郡の三辺三島の硫黄島であらうと思われる。

氏も述べられているが、語り系の諸本は三名がもともと鬼界島に同時に流されたように叙述しているのに対して、増補系諸本は、三名が別々の島に流されていたのを互いに慕いあつて成程のいる硫黄島に集つたとしており、この南海諸島の記述がかなり詳しい。富倉氏は延慶本を例としておられるが、他に長門本をみても

さつまたとは惣名也 きかいは十二の島なれば、くち五島は日本に随へり、おく七島はいまだ我朝に従はずといへり、白石あこしき、くろ島、いわうが島、あせ納、あ世波、やくの島とて、ゑらぶ、おきなは、きかいが島といへり、くち五島のうち少将をば三のとまりの北いわう島に捨ておく、康頼をばあこしきの島、しゅんかんをば白石がしまにぞ捨置ける^⑩

とあり、富倉氏および吉田東伍氏が考えておられるように、三つの

とまりが口永良部島だとすれば「三つのとまりの北いわう島」という地理的關係は正しいし、また康頼が流されたとする「あこしき島」は薩摩半島西方の甌島^{ウミ}であつたのかもしれない。増補系のこうした詳しい記述にはその背景に九州の地の語り手たちが恐らく想定されるであろう。

さてこの硫黄島に向井芳樹先生が昭和五十三年に出かけられ、その見聞にもついで「俊寛の遺跡——二つの硫黄島^⑪」という論文を発表されている。ことに注目し値するのは、かつて山中耕作氏の調査として報告された硫黄島の伝承に、向井先生が逐一検討を加えられている点であろう。以下向井先生の論を追いながら、当島の郷土史家松永守道氏の筆になる「三島村秘史」も参照して硫黄島の伝承について考えていきたい。

まず、旧盆の七月十五日に行なわれる、いわゆる俊寛灯籠であるが「秘史」によると

七月十五日ノ晚、俊寛ノ高燈籠之敷トテ柱松九之尋三尺少々ノ竹ヲ丸メ建立、松ノ手松ニ火付ケ、下ヨリ青年中ナゲテ火ヲ附ル也、供物ハ所方ト吾カ宅ト出合申候而、月ノ当番ト親両子此児共モ来リ申候也(明治四十年大宮御祭礼神事式)

また天保十四年(一八四三)編の三國名勝図会に次のように見

える。

七月十五日の夜は俊寛への祭祀として土人大小の松明二を竹にて作り、当島の港浜に持ち出、沙を穿て是を立て是、火を燃り、其松明は、長さ九尋許下の方径り三尺許、其の上は小さく作り、径り一尺許なり。其小松明は径り二尺許あり、大松明は闌村より出し、その小松明は兒童中より出す。さて土民尽く集会して肥松に火を付て、下より松明の上に投げ拵て、火の付を手柄とし、競ひ争へり。其夜は土人庄屋の庭にて終夕舞踊をなす。現在も毎年続けられるこの柱松の火は、海を越えて遠く屋久島からも見えるので、屋久島の北側の人たちも海岸へ出て拜むという。盆踊りも続けてしている。

昭和四十五年旧七月十五日には部落各戸から竹一束を出し、九尋三尺(約十二m)の大松明と、約八mの小松明を作った。松明のことを「ハンタマツ」という。これを最初にくくりぞめをするのは親モロ子という両親健在の青年である。この青年たちは十五日早朝漁に出て魚をとってくる。松明ができたあとこの魚の料理で、最長老の両親健在の家で酒宴をする。約三時間ほどで酒宴が終り、一同長浜海岸に出て小さなツガ松に火をつけ、大松明に投げあげ火をつける。最初に大松明に火をつけた人は

鬼界島流人譚の成立

大松明のまわりを三回まわり、自宅から焼酎一升を出して祝いをする。昔は大松明にオセの青年、小松明には若い青年が投火したが、今は人が少ないので皆大松明に火をつけ、その後で小松明に火をつけている。

この盆行事が俊寛燈籠と呼ばれるものであるが、その発生を俊寛の霊を祀ることに求めるのは困難であろう。「柳田氏の説に従えば、『燈籠』ないし『高燈籠』は近世のもの、『柱松』が中世のものということになるから、硫黄島のそれが『俊寛燈籠』という名で親しまれていることは、その成立が近世であったことを物語っていると理解すべきことになる」と向井先生のいわれるとおりである。またこの盆の念仏踊りの歌に「俊寛の名および俊寛の遺跡を歌いこんだものが無い」という事実も、『俊寛燈籠』が、その伝承どおり俊寛により始められたり、俊寛の供養を主目的とするものでないことの有力な証しといえるだろう。

次に俊寛が島民に教えたという「笠踊り」はどうだろうか。「秘史」に載る「笠踊」の歌は次のごとくである。

笠踊「花の大阪……九月十日(初日)」

一 扇子踊

げに名も高き敷島の 神の祈りの御神の ふみこめ給ふこ

一九

- の島を 三熊野を続き新宮 本宮幸入りて、山名所ばかりに申すべし 身を硫黄が島なれば あゝ願いは三つのお山なり 神の誓いを頼むなり 浦の浜辺に下りつつ 沖をはるかに眺むれば いさりする舟は出で入りて 波より続く磯松の 海辺に眺めうちすぎて 向うの岩の下にこそ 俊寛僧都の足摺を 一石に残させ給ひけり 是ぞ誠の痕跡ぞとうち眺むれば氣も勇む 帯を結んで身を清め 権現様にまゐりつゝ 石の鳥居を眺むれば さてもとうとやありがたや ヨホン其のほか世にはやる 厄病軽くなさしめて たび給へと祈する
- 二 杖踊(省略)
- 三 笠踊(省略)
- 四 引っ込み(省略)

この笠踊りが「一人淋しく島に残」った俊寛によって島の人々に教えられたものであるという伝承の存在については「秘史」の著者松永守道氏も指摘されているが、氏は同時に「しかし薩隅日地理纂考や三国名勝図絵によれば、この踊は疱瘡よけに踊ったもので、長浜伊豆吉明の弟権之丞吉繁が大阪へ行った時、大阪の人に教曲作ってもらい、自ら習い覚えて島に帰り人々に教えたのが起源としている。

歌詞から考えて、長浜吉繁説が正しいと思われる。吉繁は宝永八年生まれ延享三年に死んでいるので、今から二百三十年ほど前から踊られたとみるべきであろう」という見解を示しておられる。実はこの笠踊りに続く九月十日の一番踊りである「思い立ち」の三番の歌は

疱瘡疱瘡軽々と 思う心の一筋に しほひを結びうちつかれて
 こんとひの声もろともに 花を眺めて行く程に 権現様に早着
 きて 皆一様の請願を 疱瘡易くなさしめて たび給へやと吾
 々が 踊を捧げ奉る なお行末は安静に 守らせ給えとふし拝
 み なんそんなんせん しゅじよなり

とあって、松永氏の説を証拠だてているのである。俊寛の名やその遺跡を歌詞に含んでいるものの、俊寛が教えたという伝承と事実との間には大きな隔りがあるのである。

3 崇る神と漂着神

それでは硫黄島と俊寛とを直接に結ぶ伝承はないのかということとそうではない。向井先生も既に触れているとおり俊寛社、すなわち御祈大明神がそれである。「秘史」によれば、

御祈大明神社(在番衙より丑の方七町許)祭神正体大僧都俊寛にて、又成経康頼が霊を従祀とす(神体自然石三ツを安す)社山周廻二十

四許、俊寛山と号す。樹木生茂り山藁最多し、本社東脇四五間許に、乾川あり、其辺にては、俊寛河原といふ、社地は谷合の如き処にて、山間の地を削平せり、往古俊寛の石塔、此川原の上にありしに、雨水洗崩して、其儘に打捨ありしが、其遺霊にて、神怪の事ありしが、土人恐れて今の地に当社を建立せりぞと、其墓の側に、旧大松樹一株ありしに、文化の頃、大風に吹倒されて、今其朽木猶倒伏して残れり、正祭十二月二十八日より、前晚より斎戒し熊野権現御供所へ一宿し、神膳を調べて是を供す（中略—この間先述の七月十五日の「俊寛灯籠」の記述がある）俊寛を御祈大明神というは、成経康頼は帰洛して俊寛のみ此島に留りし故俊寛自ら我神を此島に留んと祈誓せし事、神託ありしに依て、御祈大明神と号すといへり、当島庄屋長浜氏当社の代宮司たり（此長浜氏は、当島庄屋世家にて、当島諸神社社司の長浜氏の同族と見えたり）土人俊寛の事跡、及び当島の内足摺石等の遺跡に至り知る者多くして甚だ其霊を崇敬せり

(三) 三国名勝図絵)

御祈三社大明神ハ村北五町許矢筈嶽ノ麓ナル低地ニアリ、墓石等存セス、康頼、俊寛、成経ヲ祭ルト云フ。自然石ヲ以テ神体トス、宝永七年建立ノ石灯籠ニ基アリ。其入口ニ樹ノ大幹枯立スルアリ、蓋シ宝永七年此ヲ殖エタルモノナラン

これらの記述から三つのことが摘出できると思う。ひとつは俊寛社が自然石をもつて祀られているように小さな規模の社でしかないこと。ふたつには「其遺霊にて、神怪の事ありしが、土人恐れて今の地に当社を建立」したことから、福田晃氏のいわれるような横死者の祟る霊を鎮めようとする島の人々の営みのあったこと。みっつには、俊寛を中心として成経康頼も祀られていることである。

後者二者については後の考察にゆだねることとして、まず第一の問題についてであるが、実は硫黄島の伝承の中心は、俊寛よりもむしろ、平家の落人伝説なのである。「秘史」によれば、安徳天皇は平資盛にもなわかれて八島を脱出し、海路を南下してこの硫黄島に至り、そのまま住みついたのだという。安徳帝の血をうけつぐ長浜家は、現在三十三代目の豊彦氏を当主として今なお島の人々の尊崇を集めているという。さらに向井先生の調査によれば「島の中心にある熊野権現社の社司もこの長浜氏が世襲で勤めているし、代々の庄家も長浜姓であるから、行政面での中心でもあ」ったこと、加えて「俊寛様」と呼ばれる『御祈大明神』にしても、その社司は長浜姓の人が世襲で勤めているようである」ことなどからして、平家の落人である（あるいは落人であることを称する）長浜家が様々な面で硫黄島の中心なのである。

そこで向井先生は次のような疑問を提出される。すなわち「俊寛と平家は敵対していたはずであるから」両者の「因果關係を示す事件ないし記述があつてよきそう」なのに硫黄島の「落人の伝承の中に」それが無いこと、そして、俊寛のたたる対象がまず「当面の敵の子孫」である長浜家であり、長浜家自身が「特別の鎮魂、慰霊の儀式をもたなければならぬことになる」のに「何ら特別の伝承もない」という点である。その疑問点に対して向井先生は次のような理解を示しておられる。

本当に平家の落人だとしたら、長い時間が、対立と怨霊の恐怖とを忘却させたと解さねば、説明がつかないことになるし、平家の落人と称した人たちだとしたら、彼らが「平家物語」に触れることが無かつたために、俊寛との対立という史実に気付かないままに終つたと理解すれば納得できることになる。

この御指摘の、ことに後者が重要ではないかと思われるのであるが、それは、落人伝説と俊寛伝説との間に対立がないばかりか、同時に併存しているという点においてである。島人がたたる神として俊寛を祀り、その霊を鎮めようとした営みがあつたであろうことは「秘史」の記述からも推測できるが、俊寛のもつ神性はそれに限定できないのではないだろうか。というのは、落人伝説と俊寛伝説との間に齟齬が認められないこと、加えて、俊寛ばかりでなく康頼・成経

も合祀されている事実から考えて、俊寛には漂着した神としての性格が濃いのではないかと思うのである。本土から隔絶した孤島に流されてきた者は、都の側からみれば流人罪人でしかないが、島の側からすれば異郷からの来訪者であり、その者たちは畏怖の感情をもつて迎えられたのではないか。俊寛、成経、康頼の合祀は、たたる神としてより以上に都から流離してきた貴種の神格化化ではないだろうか。そうした意味でのホスピタリティ（異郷人歓待）をこの流人たちに認めてもよいと思うのである。

それに笠踊りの始源が、島に流行した疱瘡の平癒にあつたことは興味ある事実である。というのは、漂着しその地に祀られた都からの貴種が、眼の病いやでんぼうなどを平癒する神としてその土地の人々にあがめられている（あるいはいた）事実を佐渡ヶ島の外海府や土佐の足摺岬などの離島半島の伝承調査で実際に見聞したことがあるからである。そのことから俊寛が硫黄島においてどのような神として祀られていたかが明らかになるであろう。

以上のように俊寛がたたる神として祀られた可能性は強いのであるがそれがそのまま巫覡の幻想として「足摺」を生みだしていったかどうかについてはおおいに疑問の残るところである。向井先生がいわれるように、なによりも現地において有王に関する伝承や遺跡が皆無であることが雄弁にそれをものがたっているといえる。した

がって康頼成経関係の説話についてはしばらく置くとして、少なくとも、平家物語が描く「足摺」以下「有王島下り」や「僧都死去」が現地に発生した語りによるものとするとはきわめて困難だといわざるをえない。それでは、「足摺」以下の話はどこに発生したのか。はたして富倉氏のいわれるように流人説話の全体が当初康頼周辺に生まれたかどうか。そのことを次にみてみようと思う。

4 足摺と高野聖

「足摺」以下の俊寛有王説話については、富倉氏の説には賛同しがたいと思う。仮りに帰落した康頼の周辺から、島での同伴者である俊寛の話がひろがっていったとしても、それは福田晃氏のいわれるように「世間話以上には成長しなかった」^⑩ものと思われる。それでは俊寛有王説話はどこに発生したのか。私見によれば、ことに「足摺」説話に関しては、有王を称するにせよしないにせよ、高野聖の関与を大きく認めたいと思うのである。その可能性を裏付ける例を二、三示しながら考えてみたい。

足摺という行為だけをとってみると、興味をひく説話は高知県土佐清水市の足摺岬の地名起源説話である。長門本は鬼界島に赴く成経の道行を詳しく描くが、そのなかに次のような記述がある。

丹波少将は備中のくに瀬尾の湊、ゆく井といふ所より御舟に召

して波路はるかにこぎうかぶ、是は伊豫の国夏地につきてめぐられける、高く聳えたる遠山のはるかに見えければあれはいづくぞと少将問給へば、土佐のはた、足摺みさきと申ければ、少将思いだして、さては昔、理一と申僧ありき、有漏の身をもて、ふだらく山を拝んと誓ひて、一千日の行ほうを始めて御弟子のりけんと申一人ばかり召具して、御舟に召して、おしうかび給ふに、むかひ風裂しく吹きて、元のなぎさに吹返す、理一猶行法の功をはらざりけりとて、又百日の行法をし給ひて、百日過ぎければ、聖人もとより人を具してはかなふまじとて、御舟にたゞ一人めす、彼舟はうつほ舟なり、白きぬの帆をかけて、順風にまかす、げにもおいて事をへだて、遙に遠ざかる、御弟子のりけんは聖人に捨てられ奉りて、ふだらくせんををがむべからざる事をかなしむ、りん多して生死を出まじきやらんと、はや御舟の、かくるるほどなれば、名残をしくしたひ奉り、餘りのたへがたさに倒れふし足摺をしておめきかなしむ、足摺地をうがち、身をかくすばかりになりぬ、聖人をしたひ奉りし志の切なりしによりて、魂去りて現に聖人のともをして、普陀らくせんを拝み奉りき、すがたは此所にとどまれり、本地くわんをんにてましますば、垂跡足摺の明神にてましますござんなれとあって足摺明神の本縁譚となっているのである。この場合は理一

聖人を見送る弟子理けんの足摺であるが、逆に弟子の渡海を足摺して見送るのが次の「問わず語り」の一節である。

かの岬には堂一つあり。本尊は観音におはします。隔てもなく坊主もなし。たゞ修行者、行きかゝる人のみ集りて上もなく下もなし。

如何なる様ぞといえは昔一人の僧ありき。この所に行ひてあたりき。小法師ひとりつかひき。かの小法師、慈悲を先とする志ありけるに、いづくよりといふこともなきに、小法師一人来て、時非時を食ふ。小法師必ずわが分をわけて食はず。坊主いさめていはく、「一度二度にあらず、さのみかくすべからず」という。又朝の刻限に来たり。「志はかく思へども坊主しかり給ふ。これより後はなおはしそ。今ばかりぞよ。」とて、又分けて食はず。いまの小法師いはく「此ほどの情忘れがたし。さらばわが栖へいざ給へ、見に」と言ふ。小法師かたらはれてゆく。坊主あやしくてしのびて見送るに岬にいたりぬ。一葉の舟に桿せして南を指して行く。坊主なくなく「我を捨てゝいづくへ行くぞ」といふ。小法師「補陀落世界へまかりぬ」と答ふ。見れば二人の菩薩となりて、舟のともへにたちたり。心憂く悲しくて、泣く泣く足摺をしたりたるにより、足摺の岬とは言ふなり。岩に足跡とよまるといへども、坊主むなしく帰りぬ。^⑩

とあつて、この話の場合は明確な足摺岬の地名起源説話となつてゐる。長門本の場合も「問わず語り」の場合も、ともに補陀落渡海する僧とそれを見送る僧の悲嘆という組み合わせにおいて共通する説話であるが、足摺岬は、同じ土佐の東端の室戸岬とともに補陀落浄土への東門としてふるくから知られてきた土地である。

たとえば「理一、理けん」「一人の僧、小法師」がこの二説話においては補陀落渡海者とそれを見送る者であるが、歴史的な人物としては「地藏菩薩靈驗記」が「賀登上人ト弟子栄念」の渡海を「男女貴賤、後ニノコル御弟子達」が「足ズリヲシテ」見送つたことを載せ、また「嵯峨山縁起」が「弟子日円坊」の渡海を師である「賀登上人」が「嗟嘆のあまり、五体投地し登露涕泣し」て見送つたことを記している。

そこで考えてみたいのは足摺岬や、あるいは足摺岬のような四国の海浜がどのような信仰の地であつたかということである。今昔物語には、「四国ノ辺地ヲ通リシ僧知ラヌ所ヘ行キテ馬ニ打チ成サレラルト」という説話がある。

今ハ昔、仏ノ道ヲ行ケル僧三人伴ナヒテ四国ノ辺地ト云ハ伊予、讃岐、阿波、土佐ノ海ノ辺リノ廻リナリ。其ノ僧共其ヲ廻リケルニ、思ヒカケズ山ニ踏入ニケリ。深キ山ニ迷ニケレバ、浜ノ辺リニ出ム事ヲ願ヒケリ。^⑪

とあり、当時四国の海浜をめぐる宗教者のいたことがわかる。先の長門本の「かの岬には堂一つあり。本尊は観音におはします。隔もなく、また坊主もなし。たゞ修行者、行きがかる人のみ集りて上もなく下もなし」という場所もこのような宗教者の寄りあう所ではなかつたかと思われる。また梁塵秘抄にも

我等が修行せし様は忍辱袈裟をば肩に掛け 又笈を負い

衣は何時となく潮垂れて 四国の辺地をぞ常に踏む^⑦

とあつて、「辺地」とよばれる海浜や山岳を徘徊し、呪力や特別な宗教的能力を獲得しようとする人々がいたのである。弘法大師は讚岐善通寺の出家であるが、彼もまた青年のころ室戸の岬や霊峰石鏡山で修行した一人であつた。四国の海や山は、そのような山岳抖擻、海浜修行の恰好の場なのであつた。

現在の四国もまた八十八ヶ所霊場めぐりという遍路行の地である。四国遍路は引法大師の開創と伝えられるが、もとより事實はさらに時代を下る成立である。現在のような形で札所と遍路道がととのつてくるのは江戸時代の初期であるが、その原型は古代以来の山岳海浜の修行者たちによつて踏みかためられてきたものと思われる。しかし、四国回遊の修行者の軌跡と四国遍路の成立との間にはもうひとつの段階が必要で、そこに介在してするのが高野の聖なのである^⑧。遍路行は四国における引法大師の廻国修行を札所を巡りながら追体

験するものであるが、八十八札所の開創は必ずしも引法大師に限らず、行基であつたり鑑真であつたりなどさまざまであり、多様で重層的な四国の信仰のあり方を示している。それを近藤喜博氏のいわゆる「遍照一尊化」^⑨すなわち弘法大師一色に塗りつぶしていったのが高野の聖なのである。その証しに八十八ヶ所の札所巡りを終えた遍路たちは今もお札参りと称して高野山に登るが、これも高野の聖の先導なくしては考えられない習わしといえるのである。

そこでもう一度足摺岬の説話にもどるのであるが、足摺という行為に、魂を招く呪術としての性格があることは中塩清臣氏が述べておられるとおりでであると思う。岬は魂や霊のたゆとう地であり、海上の彼方の他界へとつながっていく地であつて、現在この半島の下の加江、松尾といった部落の墓制やその他さまざまな伝承にそのことがうかがえる。私見によれば、この足摺という招魂呪術と補陀落信仰とが四国回遊の修行者や聖を介して結びついて足摺岬の説話を作りだしたのだと思う。海上はるかの補陀落浄土を指して漕ぎ出していく者を見送る者の悲嘆を、招魂呪術の行為を借りて表現したのがこれらの説話ではないかと思うのである。そうした意味で次の説話もまた興味深いものである。

大師渡唐時有三不思議事一即依三悪風一船近三鬼界島一ヨル鬼神形無隠見三唐船寄来三喜披三手開三肩聚立于三時船中上下醉三鬼氣三皆

失_レ魂作_レ色今限_トソ泣悲ケル船頭失_レ謀_ト卍_マ船底_ニ櫛櫛_ニ盤不_レ宜
 只任_二風波_一余時大師登_三船屋形上_ニ給奉_レ念_二南無大悲觀世音菩
 薩_一給即毘沙門天王現來御足片足指_ニ下波中_ニ取_レ梶タマフ舟風真
 向_二本塩路_一如_レ念無_レ程得_レ渡給へリ嶋鬼失_ニ為方_一落_ト卍足摺ヲ
 ス舟人面々心地真合_レ掌歡喜
 (私聚百因縁集)^⑫

ここにいう大師とは慈覺大師のことであるが、興味深いのは鬼界島、足摺、そして觀世音菩薩の三点のつながりである。補陀落淨土とは觀世音菩薩のいます淨土であり、ここにも、補陀落信仰をいうものにとつて「足摺ヲス」という表現の常套化がみられるのではないだろうか。

だとすれば、漕ぎ別れていく舟に足摺してその悲しみを表現するという方法は、補陀落渡海に関する説話と同様に、足摺岬の説話をつくりだした四国回遊の聖たちなどによってすでに管理されており、鬼界島における俊寛の足摺説話の原態がそこに準備されていたとみることはできないであろうか。

以上のような理由によって、足摺説話を中心とする俊寛有王説話は、四国を回遊する聖たちにつながるもの、とりわけ高野聖たちと密な関連をもつものと考えるのである。

さて次に平家物語の鬼界島流人譚のもう一方の軸である康頼関係説話について述べなければならぬのであるが、既に制限の紙数を

超過してしまった。それについては別の機会にゆだねるとして、本稿で述べた俊寛有王説話の成立と康頼関係説話の成立とをふまえ、そうした説話伝承が鬼界島流人譚の構想や表現にどうかかわっているか、とりわけ平家物語の鬼界島流人譚が描く別離や愛憎の生々しい語りがどのようにして獲得されていったかという方向で見通しをつけようという意図のあることを記してこの稿を閉じたいと思う。

- ① 「物語と語り物」『定本柳田国男集』巻七
- ② 「平家物語の成長」「平家物語の研究」
- ③ 「平家物語と高野山」「軍記物語と民間伝承」
- ④ 「平家物語研究序説」「軍記物語と語り物文芸」
- ⑤ 「平家物語流伝考」
- ⑥ 「平家物語と高野山」「軍記物とその周辺」
- ⑦ 注③に同じ。但し山中氏の論文は未見のため福田氏の紹介に従う。
- ⑧ 古典文学大系
- ⑨ 『平家物語研究事典』一三四頁
- ⑩ 以下長門本の引用は国書刊行会刊のものによる。
- ⑪ 『大日本地名辞書』巻一
- ⑫ 『帝塚山学院大学研究論集』第十一集
- ⑬ 以下向井先生の引用はすべてこれによる。
- ⑭ 鹿兒島県大島郡三島村役場刊。以下「秘史」と略す。
- ⑮ 注③に同じ。
- ⑯ 筑摩叢書『とはすかたり』巻五・三六三頁
- ⑰ 古典文学大系

- ⑰ 同右
- ⑱ 武田明『巡礼の民俗』 宮崎忍勝『遍路』 前田卓『巡礼の社会学』
など。
- ⑲ 『四国遍路』
- ⑳ 「平家物語の伝承構造」『中世文芸と民俗』
- ㉑ 『古典資料4』一八八頁